



俳諧中註供養
完

中村俊定文庫
文庫 18
427



遊心きりぎりの空兒拾ふ

多子

かきくやくん

し

くわん

秋夕普磨一よめ
夏おと人よ遊

あり人し煙、暮、秋の夕

知笑

州難竹多序

学難極々神の如一

香中まはし踏皮し

千美八子七屋周件

側 *ゆき*

一 素と綴るも素の如く
 付まらむ時を如く成る
 七 一或比丘盤石を序



凡例

- 一 表八句と祇祇釋教と辛辛を撰るに
百韻をつめたる心とて古人行脚の例は
一 其ふと縁の能なきむはひたる者
ろこは古能とてひて綴る一も人乃号
そのひてかこくこつとすものなり
一 表の順ハ各所とてりて次第を述べる
句順と名所の順とある一

一 嘉定庵とがくくろをるる師の坊れ
ろくふくり藤乃付むらひ移ひ一庵に
今雷堂看之せり別社中の表と合す

以上

東武

雪中菴

蓼太



江戸苗別

百願下署惣連
二十余人出立



家屋も捨棄す涼柳陰

蓼太

比多清の北誘ふ旅は

吐月

君の代世明和二年とあけし

周竹

若き時と累に雲よかけし

奥波

眼息ふとれく月て物おれ

胤腹

袴掛乃風よかたり

桂山

月け多牽く約も嬉しいり

信史

ちよきく二枚の落芳

飛隼

柳...
特の...
百九

遊行柳

乃のく小あふなりく柳のけ

志ろーとととせまを向りはま

け風語こけまを向りはま

ふふまの葉もま

許賀連中

一そくひ賜あふ清ふりぬ

藝太

柳り乾く汗の濡夜

一兮

二結小糸乃試楽夕くま

周竹

連くふり美る所く前くくるり

洲江

三袋天定大工の伊まれ二所

孤帆

口く戸煮ない借屋分合

夫

月あふ強りあはるの夜もま

兮

狐と破すの血たまるる

竹

白川園

初とたうすことうたえしと
あそ風ろぬくまの川の空
徳園漢

みやこびくまきさうしふ出しと

輪政

さうさう教しと白川園

淡香連中

行神をうさの川なり友あるも

葵太

日まじく川を二所の神蹟

露秀

本がくまてあうひもの啼なり小

周作

淋やまゆきば公事乃おほ

園山

たりやうらん心をまに深るをう

露教

女房さう世の志と二十

梅仙

中垣も中徳きふまの月老岩

露滴

蒼々あまむしと水の中

沾露

安積香山

東猪寺に坐する秋の夕べに
 翠のうららかに之席のまをりし
 行脚禁座の折をあまそ
 ぬあけふ新茶も娘も一何さうや
 於実方此暮なきまに一猪足と
 柔はうまやれやとゆいあふれを
 同あふは

中宮古路とて店連中

里人々己もさきともの花うけ
 花白小乾く暮の夕月
 葵酒のまに今難乃池ま
 こまにうららかに墨別
 在あゆれと年ハ香の紙
 雁足
 かりく春のあつとく
 日弓虫鼠のゆも古
 秋夫
 夜意乃政中系あり
 百年

里塚の岩屋

陸奥の石ころ、東北里塚了

鬼ありのまろくま〜いぬ〜

まま〜と岩屋も〜して産と江を

か〜ゆき〜人のエサを〜の〜

お〜る蚕飼する小家〜ら〜り〜

二本松十二楼連中

素子よ〜遠きお〜ら〜木下園

蕨 右

練りあ〜の〜薊鬼る台

一聲

足明ふ〜〜〜〜〜

周竹

拍掌あ〜〜〜〜

春下

石を〜〜〜〜

市井

二女〜〜〜〜

太

詠竹を〜月〜

声

た乃〜糖と虫を〜

竹

えうけもうたをけもつてをき子
和名や月海くもつてか

文字摺

吾漢猪白唐の紙にまゝ携
奉りり秋葉といふ葉の汁りて
此石紙をゆきて我家に産る
此紙をを拾くく平白を解

信史一鵬接連中

凡そ乃のやいふ帽子小志はふ下り
葉くう紙からる夏草の店
改えを何ものをひきてぬく
一日まゝくこのねひなり
うい葉版なりあるいてきぬ
書紙よりして筆お賣との
あふふて六角堂れ朝の月
福さく史鳥の紙ハ折りく

藝太
吾漢
周竹
棠雅
指月
猪白
東吳
曉水

世名しつて四つしの雲すはあつた

葛松系

ひしハ庭理系宗の受後として
公家の枕造まつりなり今ハ松山福原の
と念として終と葛の表系マニハ

世れ中の人よハその松とをえり冬を枯りたれ

于時保元二年二月十七日松が信朝が学英生年
四十一申の刻ありぬとや人の松の本とけはり
くきくきとよみぬきとと淋とよりふつは
吞涙も素門してまじり彼松ゆを松も
いれまともん本立とのありたらりりの小ころら
あしはて茶をくまへ新古懐の涙とくこの

素折養耳店連中

記きさく雲子けり葛のくれ

葵太

人ハけき記清水をきて

可貞

心おと喉のみやとと立人止

周竹

驚てあし茶漬とてまい

田車

守らまといひして九年北石の上

秀逸

今耳細く矢の根折く

射牛

今月素系宗行しと系枕

卜白

拍夢心や月やり胡を

得秀

道祖神法樂

乃より一里阿まり草むらひにまをて
ゆのいさやう宮居のまはらんと
家由乃神使いそくくそはゆる
くは猿田彦命ハ申ほくのたふ
しは子とあまはし神皇正統記
初よりものこりて子の孫也

仙府止鳥居連中

け祓乃阿と友跡の枝折は

藤太

子と世は初る杖もまは

桑里

奉送もくはくくは噓言く

周行

小判をむらぬ語氏とふ

知昂

干て並細く破きて次戸の家

洗聴

百乃遍も他力本取

松起

甲きちみ碎きて敵のたもとち

芳角

古はく阿まふらん衆は月

布朴

実方古墳

乙未の三月に於て実方中將の
 古墳と吊ふは朝臣部と云ふ
 朝臣のゆゑん事を証する
 ことなき先給ひしを魂者
 たりて墓盤割の版と云ふ
 いひはるべきにして

仙府嘉定店連中

雀小とぬく袖ありふくし
 嗚呼と紐く梅女のゆき
 抄子左衛門將軍膝のふ
 比丘尼の身法たゞさやく
 阿の波ふ志くし里ありくし船
 くくくくく足稲妻の月
 閑ふくくくくくし水きくし
 くめこそ秋の酒も之解

藥を
 楚香
 周竹
 穿石
 高
 太
 石
 竹

武隈松

ふらふらのむらさきなまの夜に遊ひし
くはのみまるとあふんと何れ二本れ
あふのなまをまらやうなましうりけ
うののらうしふ吹うしうまきんけ
あふのうちありふらふ子葉もあふの
くはのせやとまきしうりけ

仙府嘉定庵連中

象たも松のまらうし下まき

藝太

涼こして月此夕あ

方水

琴 忠空心仲在過く小

周竹

書 無くまき 嘘守てあら

太阿

分 教のうらもあぬ子い象ひふ

水

音 玉花ともゆくやまのうれ

太

人 工声して師走の啼子鳥

阿

魂 来まき夜に燈をうりけ

竹

何處を以て言ふに當りて

不志山

みちのくのとらふくま川乃らふくま

人日まき人の山とさうし

くまもくまのなまき村田小

入て何し得壽々樓上く一板麻紙

村田大庵密連中

かたも言わす人の山涼

藝太

里を言まひ知乃さうら

得壽

傍草の中とせうくを

周竹

何るあはめさ物りハク

雪氣

漸 焚者くらんく細く活く

雪頂

賽ハ帆と揚て

善千

方明の影とくけく散柳

尺童

くまもくまの山とさうし

茶喉

名取川

陸奥よりありとふるまはるる川

たゞと名なきていづるしるる

只名利の控へたるはむし今

あつひのむしりやなまのまの

くらしむ旅の労もなまのまの

仙府是氷店連中

涼しきや志らくは家政より水

蕨太

むしりの影はたなり地本

芳角

世の中ハ近知忠沙流々年立く

周竹

こゝれ結納の女大車

茶車

志凡小は姜くくして薬の湯

李角

それは私を先隣因士

雨夕

夢に並月意讀乃天下

芳水

きしきくわはは居れ又

角序

愛宕眺望

萬葉集卷十八天平勝室元年

五月十二日賀陸奥國出金

須賣呂伎能御代佐可延年等阿頭麻奈流

美知能久夜麻爾金華佐久 大伴家持

こゝろのいふし一信し今や仙府打穿

長安十万余法をいせ一日控司のみし

つらつらまうけさして世山之あまひし時

仙府嘉定后連中

波二日此蔓しとそし令華山 葵太

青田をちゆか白帆何艘 橙司

出まふ小ゆと曾呂利通辯し 周竹

ふふの編らして居りあり 夏雲

組町をむしりまうし此後まこれ 司

出むふふし一袋夜の本を 太

毛纏の夕くまを舟と夕月夜 雲

徳口ゆしに草くらへふ 竹

ふのひをいふ事なり
の夜のひより

紫山
記笑

木下

みさゆりひこらとせ
ま城野乃木のり露ハ
るふまきさきり

仙府嘉定庵連中

水音月の音とまそら女陰

琴太

杖もたふし小まそ涼風

女琴糸

側うらあふじえのまゆり

周竹

喉乃琴整と障子あしり

女白之

遠くふ姑蘇城介此ま山寺

琴

有のりさす再小頭城

右

秋をふとくまの信忌胸あひ

白

唐すはやく草乃初物

竹

宮城序

治まる代の市店ハ朝日あつて
 農と世とくら山の家はついで
 名刺もはつてあつてぬ子のこゝろ
 きりぬいのけしや
 國守より境本と松と榎と竹ひて
 又うらぬ夜多歩路とひれ
 言はぬ家へぬかりもひり
 なむりーく

仙府冬至居連中

三三三〜こまねもび〜の綿くれ
 月若ひ〜のと蹄と探登
 とりれ日と本の端乃袖ぬま〜
 ちを〜の顔と痛てこまねぬ
 一歩はゆめくら絆つた〜なり
 大坂松子なり〜やい黄盆
 惣牙てゆ〜と〜不そ〜
 反立肌の〜と〜

蕨太
 東糶
 周竹
 急耳
 拾紅
 春耕
 丈芝
 拾瓜

十尊菅

みらねくの十尊志業あは
七ふらは天は疾くあは
らぬふ家祈し

仙傳前定庵連中

祖父婆くの姿疾もゆく菅の秋

蕨を

むくなくく老斤里乃月

孤峯

軍記ふくも志扇於くゆく

周竹

くくはくくく文工もひ

三峯

水の子氣をくほとあつは

孤

日とり車と雲の下陰

右

不ぞと守証くくいゆりけ

三

千葉子この葉の煙がさ中

竹

壺碑

風土記曰坪碑ハ鴻の地不有り
 昔鎮守府の門碑より惠美朝猶
 之と傳造一法書を其見雲真人
 ありて今崇々千歳のかつまふ
 海まりといふん

仙府嘉定居連中

その墨石工入々やふてのむ
 城ありて丸る木の末枯
 草履るるあつし月れら張て
 旅乃以々々一足日知
 姫君不流々やりふい芦れ露
 亭子や一白く玉木草々嫩
 門表れ穴なりやまふ善う
 あやうハ何笑々此景とこく

葵太
 歩明
 周竹
 麦車
 卯
 太
 車
 竹

草

末松山

葵子船くさくに袖をふりけ
き急のきや戸波くさくさ

中島山波きう記きうきうきう
家より志ゆ家人はあ〜〜

仙府嘉定居連中

秋風や今くゆるく波のき

雲はちくく小月き古寺

遊人く夜きうくさくさのくし

思葉の卯れ幣くききき

鳴原も盧小居て実く何きぬき

ぬききくききききききき

かひふと下目くさくさ地より

いあけくひきききききき

葵太

習齋

周竹

迎水

齋

太

水

竹

野田玉川

夕立しそ吹風うしてみらぬの

野田の玉川ちよを鳴なり

今八川あきて田こなり

そのころり細ふなるまは

残りも念ふ

陸竈連中

追きそくきく尺もや川子鳥

藝古

一幅さる袖くあまうあ

征支

うなひさう旅久もや寸月晴く

周竹

吹き叫と何異ふとも

菓竹

追留も改ふは若れ蛇くさ

支

新藤を何る譜代お侍

太

梅 平目のまらりきる冬おれは

竹

又寸乃麦ふくま香白香

竹

松崎

花紅紫のりけ浦乃煉のくまてく子賀れ
 浦之金さききい海秀奥し航をふい
 して今宵ハ旅店の樓をゆきしきま
 奉ふ七月十あ夜は月又大雲のねん
 たり吐て海上氷をまるりこく一寒も
 宵然くくくく客人の影はよるほふふ
 むる金かりりれば島のりりりり

朝帝やちとまり恋の子松崎

葵太

日平湯うらふ波のまね

奥行

かふくと新酒のくまてく

周竹

み十き歌れ去つ整かり

海秀

ほ呼の李婦人いあさくくく

行

風呂中く歌乃楳れ夕景

太

くくあれ竹ふまきの紫くまの

秀

き解けく上の醜砂山科

竹

平泉

前後の戒夜つゝおきゆり平泉のふしを
 へらに大踏小車のつらき帰ありたたれ
 家々と軒むらひむらちきりていとさき
 蟻のこゝにわはすまろ人を報阿ら
 こゝそふいほちりしんもさうはきけ
 令結こまのりききとやうり女房ハ
 こゝすゝ糸にた柳のほ前とみきり
 こゝのま

徒然風もる伽藍のあふた神とむら
 かゝ程芳の風をひく夜の雲いと
 舟のふと和泉式部う艶情とさ
 こゝ波のまはしと深き之う候と
 月の山になくま薄白ふの香の
 室根ふじとまねふはたきき
 いふせのくはるの里はま
 何ちう鼓と和ふと似たりと
 禪房ふ何宇中と尋令色堂
 経堂吉祥堂

神社仏閣山に日映し月を映やくなはくむるは
 柵と後土和泉三ツの石あり臨流岸を抄ふり
 流星の山と凌るやうやく交ふまうこまにまいて
 秀衡一門の栄耀よりくもたらし口をあまんする上ら
 風と烈霧とらふる自然収むる上は寒天の梅はをる
 柵もまいては所をわたりたふ露を九華を街に
 子秋とくくは急は十笏の浦に万代と志とま
 只今まき

山目連中

山ろひえ川なまきり秋の風
 雲うもり馬くらき月
 出りりまきり臨流の確踏
 寺まきりめり瓦子年
 怖く小蛇乃軒とさしのと記
 けむれまきり合りり
 女席もこけり清英のほひん
 初まきりまきり

藝太
 桑林
 周竹
 笋之
 林
 太
 之
 竹

諸絶稿

みち乃くのねいそ花梅やまきめしん
あまぬまの才いころゆくらん
と梅の丘古河とふる岩のころまき
ありて今も旅人とまれあめ
ころゆくらん

仙府嘉定庵連中

朝こよひ草の結絶や梅ひより	藝太
榎きふくは行あきの月	線水
本鬼ふ百物ころいおどまれく	周作
ねん蕎麦の集淡き色く	如文
み月あのみやふふ事う降らら	白花
二十三年中の言もんもね	四友
禱もつ子もつらて娘入り	陶家
無言表ゆふ菜飯らんく	水長

亂波遠空

四くま二匹揚と目洲しゆれ
 ろもたてて我初れ地きり
 きのく川右とるふとまり
 東泉禅林ふちくく足を休む
 ちん風強のなもりけり

武蔵川菰連中

廉の事や子路をわらすみまれ川
 眠るまき子にま和中の月
 山翁助風炉の金波を酔て来々
 頭中ぞりとい鳴啼くいさや
 吉原に意といふまのなうりま
 神の遊福も門乃禰本
 一尺乃借小成きりまき風
 風はあやまのたのとりあり

菰太
 蓬戸
 周竹
 如勝
 都門
 来扇
 風絮
 破弓

一帯の山

赤岩

景

赤岩

友菊と出くさせ綿さうしり
と約せしはきく人只帰景亭
うし遊囊とかくる日也

武蔵赤岩連中

菊の香やそ忘れ九日と花乃奥	是小百里の尺巾の春の露	浮雲此二階の娉嫁かくまひて	胸のしらほく卸てハなん	松石玄楓とくろく着しと	木の葉おろし千鈞破碎る	双六乃負と碁盤一しとあり	八百菊屋おせまふ太
葵	帰景	周竹	曲枝	波城	西出	山史	都川

名詠 仙臺冬冬至店社中

おろし海くまきくまきやそ秋の岸
 松系と出く松乃何ける落葉水
 馬取く喰跡さきく落葉水
 月こ己く角やしらうて麻北産
 美點や多くむゆく水刈り
 山畑や日乃落くる大根川
 葛の紫いさくぬうりなりげさの秋

東 鯉
 春 耕
 芦 百
 菊 史
 蘭 二
 拾 紅
 右 幸

伊冬志葉くも何りきぬま何也
 七夕や柳も去乃系なすも
 江戸娘さくすも何り風中
 松く梅や只夜もくあまの父
 苔の戸と心歌く川く鴨乃喜

菊 好
 拾 瓜
 鯉 子
 利 天
 丈 芝

止鳥店社中

蜻も目録さゆくも何りきぬま何也
 ちまくとおめふ花何り蕎麦畑
 うはるとの萍くして信より水

布 朴
 和 文
 麦 里

すくもきや茶煙の月知こひ
水際と池の坊より柳うれ
夕立乃をとりさうらや虫の橋
いけりり以松こ吹きそとさうれ
本塚多や家本由くらも眠るせ
洗徳
松起
北里
笠也
知昂

芝非庵社中

常焼こからさ命や三つくす
出女や袖くらくらふ袂衣代
くひ尾や跡のつ母と沖の船
芳角
芳泉
李角

番祿区のぬく糸もな一秋の言
くくひすれ遠の子とけり京の町
みーっ夜や墓のつと片陸れそ
本がうー二月ハ瘦けり富士乃山
鬼灯や娘や譲る荒るさけ
鞆やと人しとらや浦乃秋
角序
一歌
嵐十
風沙
雨夕
嵐来

青燈下社中

嘉定庵とたりてり

稻ひーろんをくらや茶はんふ一
祇川

ちろくくと氷の後や小春——く礼
 湯豆腐と喜ばるやこもり船
 やまといと晴月ハ連——歌阿らひ
 さらさら石と隔るを母系代
 自入まぬものほくくは春の梅
 おり後——と漸接の塔や銀子れく念
 糸掛ハ谷うのせきや花乃や戸
 山公のこ前せぬ星や花 為
 白造も名ハおころうま——菊の酒
 岸松 又風 園有 福里 林石 此水 三夕 湖口 呂音

志うくや茶れ本の中銀子の声
 岩沼

千苓

嘉定店社中

月らこけいも有りて踊り船
 かさくさ一むらぬのくをばうれ
 人形も各形代となうれりり
 光陰の記とめくばや新燈籠
 あけなりし捨きいすりや顔形花
 弓勢をたうし改まるのけ——子
 蔓ものに結ひめ出来てらん不代
 習麻 楚君 太阿 方水 麦雲 麦車 孤峯

蘇糸や白いと赤い婦妹	三峰
泣きもあふひ初喜や水後川	穿石
厚ゆく山や綿の織いりき	白花
再ゆく日言いきそり女帝也	月廬
鶯とこそ花はたふれ鳥爪	完幸
翠水も岩逆水や夕の月	紫丈
名月や波あふり花山し	如文
猶妻の端く片しや丸木檣	魁耳

嘉定店社中

泊竿小畑鴻しん紅糸新	橙司
石山も舟く早るや夕の月	近水
菽入乃綿く舟とり本綿代	歩明
多葉や指く冬乃まき取	陶家
蒸餅や高良は晒の搦りめ	緑水
萩萩の骨こなりら枯跡く礼	四友
妻乃夜れ夢をうつハ蒸菜水	水長
松小屋の就之出来て木の芽水	丘車
うらうきも大槁の縁とこそりり	真行

就之入松蔭の隈や清月
 海秀
 羨草や味方、原不立り
 臘麻
 去もゆい各の袖くく不き梅
 怨波
 浦苔けや入齒くくして照のく
 月氣
 福活の香や為又の伽羅の割心
 山曉
 淋しやねふく子干大根
 魁峯
 乾くやあさく、蟬と絶てり
 李山
 名月や空りあられを交し約女
 琴松
 直由とふ露れあまりや初志くき
 白之

入おや出の指おふき急乃秋、
 琴糸

山目社中

授くまきくくゆい急ふお撲ふ
 素林
 阿とくもあはくまきぬ田螺代
 筆之
 物人乃美く寐て居る麻子式
 稻秀
 菽入を泣きくくもや守茶久礼
 里皓
 帯もくく細りてきく、夜川
 中き守
 丸之
 菊山
 曲枕
 詠碎てきくく、詠く教さくく

宵月の詠をるる内ららるれ
わしあひのや月も念息て雲くま
そらいとも晴ハあらはや芥子のむ
松峨
草嘯
梅里

宮野社中

黄昏や故やりのうらこ里ひそり
ちぶらうらハ虚こ在て亥の柳ハ
魚くふれ咳やうらりの志やれ草
横雲乃帯引きそりこりこ星
むし何や菘ももうら雲の帯
澄江
玉筍
麟趾
西河
晋月

松子やあらしやそる石比翁
あふくこ劫くそり交柳
虫りふすそぬ浮世や比丘尼ち
柳江
摘芝
楚江

村田大庵社中

入月こちを細みち中庵のこ念
跡も山を吞まそく廣一旁乃海
之日月と様こいこく莢苔小
斤足らぬく失く蟻れ君尺小
こゆらうと劫ぬるここふりれ
埒壽
雪嵐
舊千
雪頂
茶腋

車哇
七二

菖蒲乃沖よびき居る夕下ハ 尺童

素折養耳店社中

いさよひや星の代貸る園少一 可貞

十六夜や一度くうくじ八百八島 回車

新坊と青しりしあひさう子 秀逸

夕くまふ心乃うくく柳の船 卜而

呼上糸一足まーぶ踊代 射牛

福清一鵬楼社中

曲ふや奠も雲のび海海水 吞溷

初ゆく之里よーりあう汁 指月

あら秋の園と涼すや十六夜 猪白

新月の孤一と名や殊宵山 曉水

月心とめよのーにきく柳水 涼花

夕くふや陰のり所へ咲くり 蘭雅

青や花葉つう知ハ柳の船 东笑

二本松十二楼社中

志乃のめにくらぬ言や山 梯 一聲

水多此空をかけるや汐干沼 市井

末うまやまの跡くは據何世 春丁

かま古徳と店社中

尻去りて啼や月くまのかんこ名 青竜

系ゆくくや端まき了葉乃起去り 秋丈

田一枚くく正印して水鶴水 雁足

なふらまき了番是又ふい草猪 萬象

関より此分別沈くちりり分 為春

秋の日や秋老るくく秋法師 長江

くく坂尺ぬ人乃何所や君の竹 素明

須磨といふにそら一向も秋の音 百年

香と茶も汲く菊の何くくこれ 樗門

乃ろりなぐくや夜まれ詩のくく志 北山

花と来さ了乃是たりとみからうり 泉之

ものくみむのそはうく月の隈 百川

皂角く風のそりや秋乃くく此 篤甫

令持乃町と曲まはまぬさうり 竹堂

安積教重麻社中

十九和の一連本よりまきと云傳 落秀

七種や秋ハ三ぬされ膏の香
 菱の花乃一反てりり盛る分
 幸崎の乃くこ松子と異う如
 夕う海や馬と川いむ花中
 七夕やまのう志をきかすあつ
 くの秋や藪へくも蝶ひし
 本からくや斗の川くの星あり

落教
 梅仙
 圃山
 治臺
 耕夕
 露貞
 露浦

茶のく礼や平等院ハ冬本三
 白石
 麦螺

夕雲の裾ぬくくくり女七夕
 南記
 星

才ひしゆ小一回さくや去用干
 出酒田
 斗南
 山形
 千和

壺碑あり
 大派
 壺窓
 片くまさ守虫らたんで礎く礼
 上山
 投茶

得くの飲おひりり細代より
 秋田
 六川
 用行史の對付
 初唐や乞くくきれあがりも
 松葉

羨くきて風やりのす桂りれ 象写 湖南

羨乃るふみと深きハミとる於蝶小 志津 舞流

花の解さゆしと半りやおる月 志々

冬くそにわした枝も何の柳り子 照志 薰雪

そくとある芝あくらし花の陰 照志 一分

半越さむとふんぬ桂り船 上尺神田 朗舟

喜くと毎乃居立る雪舞小 雪宇

水ぬるむと何の喜き柳り小 大江

馬の子れ母とむくく 夏世水 蕨哉

あまのて毎こしけ入中魚小 雪還

晴てく声乃篠くく蛙り如 鳥雪

武見赤岩

又ふぬ一本志秋やふれ月 帰景

雲肌のもも裾浅ふす海り子 都川

ふ引ハ控て志向や大板月 曲枝

不そくふす心や雪絵の雪ひと何 五出

何く何いや水と流ても岩何く 山史

夜久き月水なりけり水伝心

截若

波城

これぞとのおゆるる月夜や滞花

川友

蓬戸

禅堂乃社あり笑ふや鶴改む

如豚

狐火と人々きりて枯野小

都門

糸をぬを門とまきく石く礼

来麻

まのひよひ初小強くし鳥小

風紫

阿ま〜て水く霜垂る果小

破了

本から〜や今宵ハ道なき家の松

山時

行秋の古郷へ山乃あり記うま

松伏

三舟

松凡乃春々来とけり初ま〜ま

年雲

得くまの身に折く〜高梨代

巴人

遠見掛川

日も一里をくなら時汐干ふ

之園

靄り細き初守初もけり夕月

其挂

のやすき園端志失て娘子の声

雪花

破へ来く破又奪〜汐干波

鳥道

山吹や萩ハミのふ水走も
 泥を出て雲井の神や杜若
 あやれる陶甕や雛子のこゑ
 飯臺も玉一物なりたうから
 阿まてらす下右の津所や雛糸
 水走の勝つりてたぐ蛙
 一日乃凡のよととやおろる月
 妻面や膝へこもる琵琶の藝
 阿帝
 吳笠
 露堂
 やひと
 菱園
 楚江
 九葵
 口明

あく雲の焔となりけり山吹くら
 蛤小波の花有り志不ひる
 いふ凡こちうくくらん風中
 落桂花乃をさなぬ秋も
 上と見る奈々なくて柳ハ
 紅梅や神のこゑも響く
 澆やとあふてきるく柳り形
 皇の御や十粒くうりれるの跡
 相良
 南梁
 望来
 磐石
 东廬
 菊明
 柳甫
 巴兆
 楚竹

渤海寺

草

七

松の介と書ふことの何初志くま 又羊

尔因

不とくまはあまのり花くもり
子蕨やま本のくしれ並合せ
玉川と後れやくるく 埴く礼
あまのさうくぬまのま花代
流とくまの老の思事や又夜
急園

河骨や水のちくくは咲たくく
内田 桑女

星花く園と後たり梅のそま
小磯啄の婦も事の日や冬の梅
おろろ夜をかしてまり梅の花
羨草や肌もおさゆる閑くく
伴の書ハ貫ハ洞やそらりあ
志ろくくとあもらさ交て標ハ
三曉
波道
葵水
枇杷英
冬雁
虚舟

送別二章

あくの花と写しん院やくろ
まろりや虚の喜れそりまを
柳家 鶴路

ちよこ又筑波の淵やちよの河 平川 芦毫
 一筋二日のまゝ 一とや竹まき 湖天
 花雪を吹散くももをり 花雪 其川
 鴨も川や追くも 雪の水 園二

送別

芝一坂の首途の曠やまはれ 真可
 矢立もも釣く一とやり 祇交

汗番ハ石を賣りとく川賣 耳埒 後府
 下陰又器ひくくや糸さくく 葵丸
 之吏婦とも喰て居る蚕く礼 葵旦
 うく日と持あくくく 榎堂
 和比くくや端まぬまけ 新法師 馬老
 乱唐の志す中になきゆくく 都雁
 志く奥や一とくひりく 葛女
 欲する家乃糸くり山さくく 兀子
 福さハ淡吾乃れく 大耳 徳田

三枝の浦止を宿こみち行くのち御とこころ

松島乃首途とてなす妻茶井 し 兎

家おこしる祀の祈こころをいして老師の起誓と
きこけけた古乃り旅思をぬるもこころをいしたの
年月の比と西上人の御をいすまう昔とあふひ
八子とい風雅とせれ死せんも四千は目やまき
年なまをいすそのこ別のあるらばそめ
七竈店の扉とこころのあふこころをいすまめ

行房れその夜も秋と似たりたり 周竹

东武

あくおやねはこより葱一把	天厨子
梅うきやめとれ一本このころまき	婆心子
若清水女むすひなうきり	更流
岩松くよりびく雪と朝日バ	楚水
面舌のころまきくやいゝりり	桃漬
礼してふれとりのひる柳うま	眞佛
浦止乃女れ髪と髪ふや夕下	女 蹄菊
妻の良とそして長一衣の花	仙夜

笠のやうな涼しき影や清少の
照入梅と尺定めも一松の
涼しげや政院も月尺の秋

白牛
東川
素丸
六の涼風を

出陣の経路

象渡の幾ふ所もわづらひ

周竹

周竹と象渡

平八郎の

名月や波よりひより浪華山

葵太

吹よせく夜をたのむ来りぬ
波やうらやまの秋なり月
交りもいらぬ初茄子
雛乃駕二子の肩にうらひ
鬼味噌の浮名はたねは
人稀に菜穂もろは
吾れとあはして遊む
山よりや月のやうに
白川や閑よりけりて雲の

南陵
女南室
鳳宿
菜穂
是物
西流
翠羽
嵐亭
周竹

山花のた奥ゆゝ志乃ふ摺 周竹

仙府の一庭と結く藤のりりハ

六月十六日くぐりま世や習子阿母此

閑室に棲まのりりくく保文

解貫ふ隠居も道し 高定居 葵太

七夕

長指して星の一本ふ笑ましん

取つゆきき卯の花と成るけり 求光

ものいとぬ客もよみれ中かゝる 眠我

燕や夢をうらふ琴のうらへ 桂山

譬一暇きこもるや春水有 山幸

夕く星は志くぬも何れ角力ぬ 祇什

手仙ももるのまきやすは田螺ハ女 祇三

松島やまきうちをゆく秋乃雲 周竹

緒絶橋

結くゆき結絶ききりさきま

系雜改筆藤ハ鞠之志ふりり 班象

七粒や春の拍子と女きまらる 富屋

山花ゆめ志きりくくくて鹿ハ 翠光

上風と沖つしきや山つ子名
水も戸折をわらぬ氷柱の
鳴戸も氷の影ハたりふれ月
信文
雲介
落梅

毛越寺覽古

礎とかさくつまして秋のくれ
葵太

光堂

善是く一亭脱きそめむり堂
日くくーや昼飯くくふ光堂
梅咲や根くくくきハるなく
周竹
人た

曉のゆきくくくくくくく
夕くくれ朝や故やりの夜
友のくれ社家の流れ通ひ
本巻乃初もそはくくくく
阿きくくも筆打用さく
花腹
女
員知
梅人
祇考
阿音

実方古墳

塚よりぬ友さく門を木下園
周竹

文城野納原

芝萩く系くく訓深ん夕涼
葵太

只ひよの山お井に遊ぶ蛙の如
 梅の香を幣とそまてや猫のこひ
 美能や柳の影に追まると
 そしくこちのさうまくる歌うと
 そのいそぬ夫婦をせりり田舎に
 魚のぬやまの枯跡の中お嘆
 本場とまゝ大工れおぬ水鏡に
 曉の價はちう〜ち札の言
 牡丹のくろの侍や妓王妓女

六窓
 連丈
 乳峯
 楸太
 葵太
 周竹
 太喬
 舊圃
 完車

名月や日乃十五日くれてとり
 そちちと数日〜なるう鶴尻に
 名月や水こびくと恒忠月
 六月や沖お帆くけてか正船
 秋風〜焼ひ〜の赤くあり

飛鯨
 周竹
 盤古
 雷堂
 吐月

玉川の舟の〜
 夕方の暮〜
 空際や〜
 陽天や〜
 夕陽の〜

白...

中實卷用竹撰

掛川之譜

遠力散人



之新口

記

...

...

新方大場

...

...

...

明味六

千時寬政七

仲

如月吉祥日

大場